



新宿食支援研究会（以下、新食研）の活動に参加するようになって、歩いたり頭を使ったりする事と同じように、口から食べる事にも「廃用」というものがあるのだと改めて知りました。

昨年、亡くなった私の祖母は、脳梗塞で倒れたあと、鼻からチューブを入れて栄養を取るようになり、口から食べる事は禁止されてしまいました。家族の目からは努力をすれば、まだ、いくらか口から食べられそうな様子に見え、嚥下のリハビリをしてほしいという思いもあったのですが、「病院にはお世話になっているから…」という引け目もありそれを伝える事はできませんでした。挑戦する前に諦めてしまった事で、もやもやした気持ちが後々までずっと残りました。

昨今のリハビリ病院では寝たきりによる廃用症候群を防ぐため、入院したその日から離床して、少しずつ身体機能維持・回復のためのリハビリをするところもあると聞きます。それに比べると「食べるリハビリ」に取り組む体制はまだ未整備であるように感じます。必要に応じて人工栄養に頼る部分があっても良いとは思いますが、毎日を生きる楽しみの一つであるからこそ「食べる」という営みを続ける努力を諦めない社会であってほしいと願い、微力ながら新食研の活動に協力していきたいと考えています。

(大学教員 研究者 佐藤 惟)

訪問看護と地域共生

③看護師の意識改革

今回で 3 回目となりますが、食支援は多職種の協力による結果であるとお伝えしてまいりました。最終回では看護師に求められる支援について私なりの考えを綴りたいと思います。

私自身の病院勤務時代では、嚥下障害を患う方と関わる機会が多かったため、食支援に対する興味や関心を持つきっかけとなりました。異常の早期発見や、食形態の提案、姿勢、介助方法など学んだことは多く、今も、常に学び続けています。全てを理解するのは難しいことなので、多職種の方々の協力は得ますが知識として知っておくべきことではあると思います。

新宿食支援研究会のメンバーの中で看護職は 2~3 名程度ですが、全国に食支援に関心のある看護職はどのくらいいるのでしょうか。嚥下は言語聴覚士や医師、歯科医師の領域である、誤嚥しているから禁飲食にするなどという考えを持つ方は 0 ではないと思います。看護職が少しでも食支援に興味を持ち、「最期まで口から食べる」という共通目標に向かってすべきことを実践していくことが重要だと思います。そんな中で、私は新食研メンバーの中の数少ない看護師なので、「最期まで口から食べる」ために看護師がすべきこと、食支援の大切さについてこれからも普及活動を行っていききたいと思っています。

(看護師 飯塚 千晶)

理想の食支援を考えよう

新食研 next 栗原 俊介

8月3日の勉強会は「理想の食支援を考えよう!」というテーマとし、参加した方を2つのグループにわけ、理想のビジョンを話し合うグループワークを行いました。

グループワークの材料として、8月31日のタベマチサミットで発表の「南河内食のネットワーク」グループと、その対照的な「神奈川摂食嚥下リハビリテーション研究会」グループの活動や特徴を伝えました。

「南河内食のネットワーク」は専門団体に地域住民が混ざる、というよりも専門職も地域住民の一人、という考え方で繋がりが作られています。

これに対して「神奈川摂食嚥下リハビリテーション研究会」は全県をあげて専門職が繋がりに、言葉や物性を統一して質の均一化を目指しています。そのため、専門職のみで構成されており、メインの活動としては、集まる専門職のスキルアップです。食支援団体というカテゴリーで構成メンバーだけをみても専門職のみの団体であったり、地域住民も巻き込んだ団体であったり、様々な組織があるのです。

この2団体の紹介を行った上で、「地域での繋がり方編」というテーマでグループワークをしました。

2つのグループの構成メンバーは様々でしたが、高校生の参加もあり、だいぶ盛り上がりました。グループワークでは、スタッフが皆に自由に意見交換してもらえよう働きかけました。地域で繋がりを作る要素はなにか、何があればいいか、つながりを作るための課題はなにかなどをそれぞれあげていきま



す。
その中で様々な意見が出ましたが、特徴的だったのは、2つのグループともに「地域での繋がり」を作るための中心要素は、「集まれる場所」からスタートしていったことです。場所や拠点があり、そこが地域とどのようにつながることができるか?それも団体の色を決める重要な要素になっています。

人が集まろうと思っても会場を用意することに地域の特性や費用の問題などが絡むため、この問題をクリアして初めて人が集まることができます。参加してもらいたい構成メンバーがどの場所なら、どの拠点なら集まることができ、その場所をどうすれば継続できるのかを考えることが「地域での繋がり」を作るのに必要になります。

来年も、同時期に「理想の食支援を考えよう!」テーマでディスカッションします。これからも、みなさんと一緒に「夢の食支援」を考えていきたいと思ひます。

